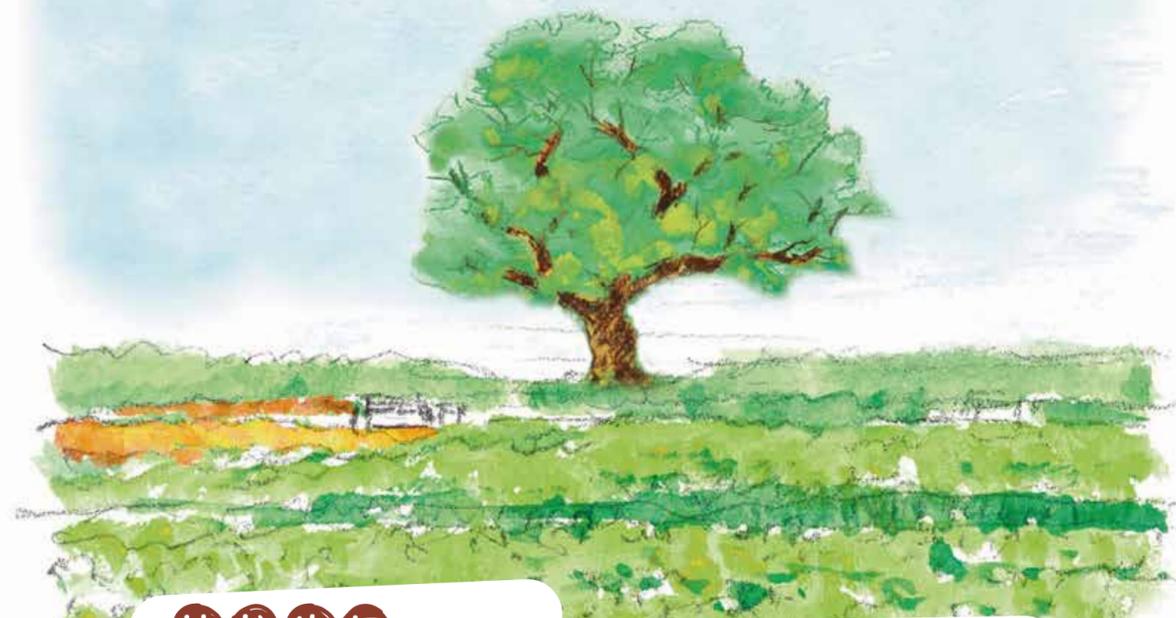


ともに

なるほど 特別支援教育 その②



はじめに

新宿区では、一人ひとりの子どもが豊かに学べる環境を目指して、個に応じたきめ細かな教育を推進しており、区の特別支援教育の理解啓発を目的に「ともに」を発行しています。

「ともに」を通して、子どもの成長への不安が少しでも和らいだり、今後の子どもの成長を支え可能性を伸ばすために、特別支援教育についてともに考えていただくきっかけになれば幸いです。

新宿区教育委員会

あのころをふりかえって (協力：新宿区肢体不自由児者父母の会)

娘は早産で生まれ、脳性まひにより運動機能に障害があり、足が動かず、移動は常に車いすです。

就学について教育委員会と相談し、小・中学校は通常の学級に入学しました。体育や家庭科など特定の教科では支援を受けながら、みんなと一緒に学びました。学校の先生は、娘のために机の調整をしたり、話し合いの機会を設けたりと様々な面で配慮をしてくださいました。中学校への入学前の面談で、校長先生から「私たちはチームで娘さんの学校生活を支えていきたいので、何かあれば相談してください」という言葉をいただきました。私の中で今まで気負っていた部分の力が抜け、ほっとしたことを今でもよく覚えています。

知り合いが誰一人いない中で迎えた入学式当日、前の席のお子さんとすぐに話をしていた娘の姿が忘れられません。学校の雰囲気がそうだったのか、子どもたちは娘に対して構えずに自然体で接してくれました。内気な性格の娘でしたが、そうした中で友達との接し方を学び人として大きく成長できたのだと思います。

また、娘が作文コンクールで賞をとったときは、「人に訴えるものが書けるんだ」という新しい発見ができ、嬉しかったです。

今振り返ってみると、娘が幼いころは私も障害の知識がなく、本当に学校に行けるのだろうかと不安がありましたが、療育機関、地域、学校の先生、友人等多くの人たちがいつも助けてくれたように思います。

その後娘は、バリアフリーで自分の好きな授業を選択できる自由な校風にひかれて普通高校、そして就職にいかせるようにと通信制大学を卒業し、現在就活中です。恥ずかしがりながらも、子どもたちへ本の読み聞かせのボランティアもずっと続けており、地域と繋がりがながら毎日過ごしています。

息子は、早産で生まれNICUで4か月を過ごし退院しました。脳性まひと診断され、1歳の時に主人の仕事の関係でイギリスに転居し、2歳から養護学校の幼稚部に入園しました。

座る事も立つ事も出来ませんでした。1歳頃から単語が始め、日本語では2～3語文を話していました。4歳半で帰国し、あゆみの家(幼児部門)で母子通園を開始。単独通所になった頃に外来の視能訓練で、物を見る時に焦点が定まるまで眼振があり、目が疲れやすく見ることが苦手と指摘されました。確かに、一度も指差ししない事が気になっていました。

専門的な教育を希望して新宿養護学校に入学。新宿養護学校では、個別学習の時間に、追視(物を目で追う)から始め、見比べる事(絵カード2枚から選ぶ→○・□・△など図形を選ぶ等)、目と手の協応等の課題毎に、先生方は沢山の息子専用の教材を制作し、丁寧に根気強く指導してくださいました。初めは手を動かすと視線がずれてしまい間違った方を選択する事も多かったのですが、次第に繰り返し見て正しく選択できるようになりました。

中学卒業後は都立光明学園に進学し、大勢の友達から沢山の刺激を受け、自分から発言するなど活発な面が出てきました。卒業後は通所施設に通っていますが、給食を見て「次は○○」と伝え、自分の思う順に食べさせて貰い、電動車椅子の練習で所内の散歩に出かけています。好きな絵本は、どのページに何が書いてあるか分かっていて、「ここ」と開いて読んで貰い、自分でも暗唱しています。苦手だった「見る」力がついて、自分の目で見て選択し、それを周囲に伝える事で生活を楽しんでいる様子を見ると、これが息子なりの自立なのだとも私も考えるようになり、少し肩の荷がおろせたような気がしています。

「ともに なるほど特別支援教育その②」はいかがでしたか。

次回は発達障害に関する特別支援教育をテーマにご紹介予定です。

新宿区教育委員会事務局 教育支援課 特別支援教育係
TEL: 03-3232-3074 FAX: 03-3232-1079

UD FONT

「ともに」は東京都カラーユニバーサルデザインガイドラインに基づき、作成しています

院内学級・訪問学級

新宿区には、病気やケガで長期の入院をしていたり、自宅療養をしている子どもたちが教育を受けられるように院内学級と訪問学級があります。

●院内学級 余丁町小学校わかまつ学級

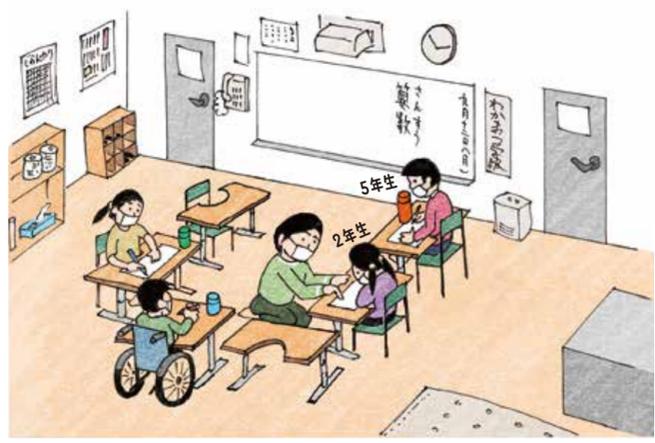
東京女子医科大学病院内に設置されています。

●訪問学級 新宿養護学校

教員が自宅や病院に出向いて、週3回(1回2時間程度)訪問指導をしています。

院内学級の様子

病室から洋服に着替えて登校します。教室には自分の席・ロッカーがあり、図書コーナーがあるなど、学校に通っている意識が自然と持てるような工夫をしています。学年や学習してきた内容を踏まえて、病状等に応じて本人がより取り組みやすい形で学習ができるようにしています。



余丁町小学校との交流

運動会や学芸会では、万国旗・プログラム・小道具作りで参加したり、展覧会や書初め展では作品を展示したりしています。また、学習場面でもタブレットPCを使って参加することもあります。交流を通して、互いが高め合えるかわりとなっています。



院内学級の先生から

院内学級へ転入する子どもたちは、時期も期間も学年も違いますが、子どもたちが仲良くなるのはあっという間です。入院中の子どもたちは、治療やリハビリが中心の生活です。気を張って過ごすことが多い子どもたちにとって、わかまつ学級は息抜きの場所でもあり、入院生活と切り離して過ごせる数少ない空間なのだと感じます。わかまつ学級に楽しく通っていても、子どもたちが本当に望むのは、入院前と同じ学校生活に戻ることです。そのため、子どもたちが「勉強や治療を頑張って、学校に戻るんだ」という意欲をもち続けることを大切に考えて、前籍校との繋がりを継続していくことを心掛けています。例えば、学習の進み具合や行事等で連絡をとったときには、必ず子どもたちに伝えるようにしています。その話を聞いた子どもたちはとても嬉しそうです。

担任として、健康状態や心理面の理解、前籍校との連携、それらを行うタイミングなど多くのことに気を配りながら、子どもたちからの発信を大切に受け止め、わかまつ学級へ転入する一人ひとりを、転出するまで温かく見守っています。子どもたちにとってわかまつ学級で過ごした時間が、楽しく実りのあるものとなるようにこれからも指導していきたいと思っています。

今回は「身体障害」等に関する特別支援教育をテーマにご紹介します

みんなでかがえよう

Aさん
Aさんは小学校6年生。小さいときの事故で片足を思うように動かせず、普段は装具をつけています。小学校の運動会では毎年6年生がソーラン節を踊るのが恒例になっていますが、Aさんには気がかりなことがあります。

1 年度始め ~担任との親子面談~

みんなと一緒にソーラン節を踊りたいけれど、不安だなあ

Aさんもみんなも楽しくできるにはどうしたらいいか、みんなで考えていこうね

2 学年会 ~先生同士の話し合い~

隊形移動のときはAさんを起点にしたらどうだろう

先生たちはAさんのことをふまえて、学年の子どもたちが力を発揮できるように、話し合いをしました。

移動の回数は少なめにしよう
その分手の振り大きくして華やかに見えるようアレンジしてみようか

3

先生に相談してみようよ

4 運動会の練習

人工呼吸器や胃ろう等を使用しているため、たん吸引や経管栄養等の医療的ケアが必要な子どもたちが増えています。

身体障害とは 体のどこかに不自由がある場合をいいます。

- たとえば
- 目が見えない、あるいは見えにくい視覚障害
 - 耳が聞こえにくい、または聞こえない、あるいは平衡機能（身体のバランスをとる機能）が著しい聴覚障害
 - 声が出せない発声の障害、出せても発音がうまくいかない発音に関する障害、またはそしゃくに関する障害
 - 心臓、じん臓または呼吸器など内臓の機能の障害
 - 上肢・下肢・体幹の不自由に関する障害
- など、とても広い意味で使われています。

参考：「ふしぎだね！身体障害のおともだち」（ミネルヴァ書房）

5 ある日の練習後

みんなが動いているのに、自分だけ座ったままで恥ずかしいな

そういう気持ちのままでも踊るのはいやだね

先生に相談してみようよ

6 学級会

みんなが移動しているとき、Aちゃんは漁船の旗をふるのはいかがでしょうか

先生はみんなと話し合いをすることにしました。

和太鼓はどう？

三味線は？

7 和太鼓の練習

Aさんは和太鼓を選びました。リズムの取り方やタイミングは音楽の先生が教えてくれました。

8 運動会本番

9 運動会が終わって

みんなが私の気持ちをわかってくれてうれしかったな

緊張したけれど、あんな大きな拍手聞いたことなかった

すごくよかったよ
かっこよかった

6年生になったら、私もあんなふうに踊りたい

和太鼓のあるソーラン節、なんか感動しちゃったな

身体障害の状態に応じた 特別支援学校 (都：都立、国：国立大学法人)

- 盲学校** 都：久我山青光学園、文京盲学校、葛飾盲学校 国：筑波大学附属視覚特別支援学校
- ろう学校** 都：大塚ろう学校、葛飾ろう学校、中央ろう学校 国：筑波大学附属聴覚特別支援学校
- 肢体不自由特別支援学校**
都：永福学園（高等部のみ） 国：筑波大学附属桐が丘特別支援学校

新宿区立 新宿養護学校 (肢体不自由特別支援学校) 小・中学校

一人ひとりの障害の状態に合わせて学習しています。日々の授業は、生活年齢を基準にした「クラス」と学習課題に応じて編成した「学習グループ」の2つの集団で行っています。

肢体不自由の障害がある子どもたちが、障害の状態に応じた専門性の高い教育を受けられるように、保護者や地域社会の要請に応じて創設された、都内唯一の区立の肢体不自由特別支援学校です。

授業の様子(例)

教科学習

心身のコンディションを整え、授業のめあてがもてるようにし、一人ひとりに応じた学び方で、より学習が定着する工夫をしています。個々の理解度を把握し、学習の評価を丁寧に行うことで、学力だけでなく意欲や主体性が育っていきます。

摂食指導

給食は食べる機能等に応じて、3種類（初期・中期・普通）用意しています。摂食指導は、健康状態を保つだけでなく、口腔機能、食具の使い方、発声などの向上にもつながります。個々に応じて安全で適切な指導を行えるよう、歯科医師による摂食相談も行っています。

プール指導

課題に応じて、最小限の浮き具を使って泳げるように指導をしています。水中で身体にかかる重力負担を少なくすることで、余分な緊張をとり、体力や運動の向上に取り組んでいます。プール指導を含むスポーツは、生きがいややりがい、健康の維持・増進など、生涯にわたり人生をより豊かにしていくことにつながります。

自立活動

理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等による指導が受けられます。歩行の仕方、装具の使い方、手指を使った細かい作業、音声認識や舌の動かし方、コミュニケーションの向上に関わることなど多くの学習をすることで、必要な知識、技能、態度を習得していきます。また、教員と療法士等との連携により、個々の課題に応じた学習をより効果的に行っています。

学校間交流

普段一緒に学んでいない同年代の子どもたちを、「同じ地域に住む友達」として意識するきっかけになる交流活動です。言葉や遊びを通しての交流は、お互いにたくさんの刺激を受け、相手の状況や気持ちをより考えられるようになるなど、心の豊かさや視野の広がりにつながります。

※学校間交流以外にも副籍交流や地域交流があります。